説教20221127イザヤ64：1-11マルコ13：32-37「イエスが来られるとき」

主人が突然帰って来て、あなたがたが眠っているのを見つけるかもしれない。

このイエス様の言葉をお聞きになって皆様どのようにお感じになられるでしょうか。これは勿論、戒めですとか警告の意味を含んでいる言葉ですが、それらのことがメインなのではありません。イエス様は、恵みの上にさらに恵みをお与えになられる方ですので、この言葉を私たちに、突然の思いがけないプレゼントとしてお与えになろうとしておられるのです。この御言葉を聞いただけで、私たちはこの上なく幸せになれるという、将によき知らせの訪れなのであります。

しかし、もし今、私たちの心の状態が不調であったり、或いは心がざらついている場合には注意しなければなりません。そんな時には、イエス様がこの私を厳しく監視して、もし眠っている処を見つけられたら、この上ないお叱りが待っている、などという様に、この御言葉を曲解してしまわないとも限らないからです。そういった曲解はいくら信仰深くても避けられない、起こり得ることだと思います。ですから聖書と言うのは、基本、一人で神の言葉と向き合う書物ではありますが、時には、教会などで、みんなで聖書を読んでいくということが必要になってくると思います。というのは、御言葉というのは奥が深くて幅も広い物ですから、たった一人でそれに向き合っていくのには、どうしても無理があることだからです。

それはさておき、私たちの主人であるイエス様は突然、帰って来られて、私達一人一人に思いがけない大きなプレゼントを恵まれようとされているのです。ですからその時に眠っていては、その喜びに預かることが出来ませんので、それは私たちにとって大きな損失なのであります。

今日から主イエスが来られるのを待ち望むアドベントのシーズンに入りました。このシーズン中に今日のマルコの聖書箇所がよく読まれるのは、この主人が突然帰って来られる喜びというのが、クリスマスの喜びと重ね合わされているからでありましょう。

それで、そのイエス様が来られるクリスマスの時を、この世には無いようなこの上ない喜びをもって迎えるには、この主を待ち望むアドベントのシーズンに、私たちがどのように心と体を準備していくのかが大切であるように思いますので、そういう観点から今日の聖書箇所を見て参りましょう。

今日のマルコ福音書のキーワードは「目を覚ましていなさい」です。元のギリシャ語ではグレゴレイテという命令形であります。グレゴレイテという言葉で思い起こされるのは、歴代のローマ教皇にグレゴリウスという名前の人が数多く居られたということです。この様に教会は、歴史的にもこのイエス様の「目を覚ましていなさい」、グレゴレイテという御言葉を大切にし守ってきたのです。

しかし、この「目を覚ましていなさい」という御言葉だけではあまりに漠然としていて、一体、私たちは具体的にはどのように心と体を準備していけばよいのかということが、よく分からないことでしょう。イエス様がおっしゃる、「目を覚ましていなさい」とは具体的にはどういうことなのか、ということは、結論としましては、私たちがその日その時に置かれたそれぞれの場所で、それぞれのことを御心に適って行いなさいということでありましょう。例えば、中世のグレゴリウス法王は、よく断食をしたり、又、夜を徹しての祈祷会をしたりしたそうですが、だからと言って、時代も場所も異なる今の私たちが、中世のグレゴリウス法王の行いを見習って目を覚ましていようとしても必ずしもうまくいくとは限らないのです。又、今の説教者がこの目を覚ましていなさいということについてどのように語っているかも、今は、ネットで検索すればすぐに出て来ますので便利な時代ですが、その語っている内容というのも実に千差万別なのです。

或る説教者は言います。。「目を覚ましていなさい」というのは、物理的な意味ではないわけで、霊的な目を覚ましているかどうか。神様に対してそのように心を開いて、神様に対して目を開いているかどうかだと思います。

又、別の説教者は言います。「目を覚ましていなさい」というのは、たちに割り当てられた〈仕事〉について、目覚めた思いで〈責任〉を持つということです。洗礼を受けて教会員になった者は、ひとりの例外もなく、この〈責任〉を委ねられています。

又、別の説教者は言います。目を覚ましているということは、畑で成長する野菜や果物、そして子どもたちがみるみる成長する姿を心をとめるということ、その成長を助け、それを見守ること。

どの方も、まことにしく語っておられて、それぞれにアーメンであります。

又、今の私なりに「目を覚ましていなさい」という御言葉について語ってみたいと思います。目を覚ましているということは、、あのエリヤが霊的な戦いを前にして、主のみ使いによって、エニシダの木の下で、眠らされ、それから「起きて食べよ、」と言われて、彼は、飲んで食べて、その食べ物に力づけられたように、私がひとり静かに食事をとって、主の存在に気付き、力と勇気を得るということです。。つまり目を覚ましているということは、充分に睡眠をとり、よく飲み食いをするということです。

以上みてきましたように、イエス様の「目を覚ましていなさい」という御言葉は、それぞれ置かれた場所や状況が異なる私たち一人一人に、相応しく響いて来る恵みの御言葉なのです。同時に、この御言葉は、奥が深くて幅も広い物ですから、先ほども申し上げました通り、たった一人で向き合っていますと、かえって訳が分からなくなってしまい、迷ってしまうということにもなりかねないでしょう。。イエス様は、この私に「目を覚まして」待っていなさいとおっしゃるけれども、つまるところ、どうすればよいのですか？！、と問い返したくなるという訳です。

確かに、「目を覚ましていなさい」という御言葉を聞いてかえって、茫然としてしまうということは誰にでもあることだと思います。殊に、現代の様に、自意識過剰で、私は、私たちは何を為すべきか、という意識が勝っている時代には、このイエス様の「目を覚ましていなさい」という御言葉も、では私、私たちはどうすればよいのですか、という一種の力みを伴った心持ちで聞いてしまいがちになると思います。

ですから、今の私たちには発想の転換が必要と思われます。。私は、私たちは、どうする、ではなくて、あなたは、あなたたちは、どうですかという方向に敢えて心を向けていくということが大切だと思います。

今日の、マルコ福音書の箇所でいえば、私たちは心して、旅に出て行ったこの主人のことに思いを向けて、この主人のことを思いやるということであります。主人のことを心に留めるということです。この様に相手のことを思いやるメンタリティーというのは、昔の時代は普通に備わっていたでしょうが、恐ろしいことに現代社会で普通に暮らしていますと、徐々に失われて行ってしまうように感じられます。

それと不思議なことに、主人という相手のことを、いつもよく思いやっていると、彼がたとえ予告もなしに突然帰って来る人であったとしても、なんとなく、そろそろだなというような読みが出来て来るものでして、そうではなくて、相手のことを少しも思いやっていないで、自分のことばかりに関心を向けていると、そういう読みは出来なくなってくるものです。

この主人というのは、主なる神、父なる神のたとえとして、イエス様は語られました。私たちが、主なる神のことを心に留める、ということはおそれおおいことでありながら、同時に喜びの源泉に触れるということです。今日のイザヤ書の箇所には、もと居た聖なる都エルサレムを荒れ野とされ、バビロンの地に囚われいた我が身を愁い、その苦しみ悲しみを主なる神にかこちながらも、その主なる神にすがりついて救いを求める神の民たちの姿が記されています。。バビロンに捕囚された神の民たちは、主なる神を心に留めて祈ります。

あなたを待つ者に計らってくださる方は／神よ、あなたのほかにはありません。昔から、ほかに聞いた者も耳にした者も／目に見た者もありません。

主よ、あなたは我らの父。わたしたちは粘土、あなたは陶工／わたしたちは皆、あなたの御手の業。

どうか主が、激しく怒られることなく／いつまでも悪に心を留められることなく／あなたの民であるわたしたちすべてに／目を留めてくださるように。

神の民たちはこの様に、苦難の中で、主なる神を心に留め続け、主なる神はどんなお方なのか、どこに居られるのかについて思い巡らしながら、祈り続けてきたのでした。

そして、新約の時代に入り、野宿をしながら夜通し羊の番をしていた羊飼いの上に、「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。」という大きな喜びの知らせが告げられました。

この時の羊飼いたちは将に、目覚めた人たちでありました。彼らは物理的にも霊的にも目覚めていましたし、羊を飼うという仕事の責任もしっかり果たしながら、且つ、羊たちの成長ぶりを常に見守ってきたことでしょう。こういう目覚めた羊飼いであったからこそ、この日この時のクリスマスの良き知らせを、彼らは大きな喜びをもって受け取ることが出来たのでした。

又、それと同時に、この羊飼いたちは、毎日、天にいます主なる神を心に留めて、主なる神に向かって祈ることを習慣としていたのでしょう。ですから、この羊飼いたちは主なる神の御心をよく知っていましたので、広いベツレヘムの町の中で、飼い葉おけに寝かせてある乳飲み子の居場所を探し当てることが出来るようにされたのでしょう。

この成り行きは、私たちが主イエスという相手を、心に留めていることの大切さを物語っています。又、そういう主イエスと私との関係は、相手と私という人間関係にも当てはまることです。

現代という、自意識過剰な自分に埋没していく危険性を常にはらんだ現代の荒れ野にあって、私たちが、御子イエス様の居場所を教えてもらうには、心して、相手のことを心に留めて、その方のためにとりなして祈っていくという準備が必要であります。

今年のアドベントのシーズンに、私たちがそのように、心と体を備えていくことが出来ますよう、主なる神にお祈りして参りましょう。

祈ります

父なる神よ

主よ、今日から私たちを教会暦の新たな一年へと招き入れ、信仰、希望、愛に生きる私たちを新たにして下さったことに感謝します。

この世で、罪に縛られ、不安に打ちひしがれている私たちの縄目をほどき、恐れがない愛に生きる者とならせて下さい。

主よ、あなたが天へと旅立たれ、今は姿がみえないからこそ、私たちはあなたを想いやり、あなたの憐れみと慈しみを憧れ、あなたを待ち望んでいます。

あなたを待ち望むこのアドベントのときの中に、確かに御子イエスが与えられ、私たちが御子によって救われました幸いを覚えます。どうか、私たちが御子イエスをいつも拠り所とし、御子を想っている信仰のゆえに、私たちにクリスマスの大きな喜びを与えて下さいます様に。

私たちがこの世のはかない喜びによりすがることなく、御子の十字架に根ざした、確かで変わらない喜びを常に受け取ることが出来ますよう、私たちの信仰を「強めて下さい。

神ヨ